水、其雲に乘じ、逆卷のぼり、黑雲の中に入る、其雲を又くはしく見れば、龍の形見ゆること也、尾頭などもたしかに見え、登潮は瀧を逆に懸るがごとし、又岩瀨と云所、宮崎といふ所まで十餘里の間に竟りて、黑龍登れるを見しと云、又鐵脚道人退冥の手代、越後の名立の沖を船にて通りし時、海底に大龍の蟠れるを見しといふ、蟠龍を見る事は、此手代に限らず、彼海底には、折々ある事となり、是等は皆慥なる物語なりき、奇怪の事也、過し年淇園子の劄記を見しに、其中に或人江戸より船にてのぼりしに、東海道の沖津の沖を過る時に、一むらの黑雲、虛空より彼船をさして飛來る、船頭大に驚き、是は龍の此船を卷上んとするなり、急に髮を切て、燒くべしとて、船中の人々のこらず、頭髮を切て、火に燒しに、臭氣空にのぼりしかば、彼黑雲たちまちに散失たりと、載られたり、是も亦珍らしき事也、

〔重修本草綱目啓蒙二十八下〕龍略○中

龍骨略○中　和產ノ龍骨アリ、是ハ讃州小豆島ノ沖、俚人鳴戸ノツキツケト言傳ル、深海中ヨリ採出ス者ナリ、頭アリ、角アリ、肢骨アリ、其形一ナラズ、皆大ニシテ重シ、色黑澤ニシテ、外ニ蠣殼ヲ粘ス、コレヲ舐レバ、唇舌ニ粘著ス、然レドモコレヲ焚ケバ、魚臭アリテ、舶來ノモノ、焚テ臭氣ナキニ異ナル時ハ、小豆島ノ產ハ大魚骨ナルベシ、

〔延喜式三十七典藥〕腦月御藥略○中

龍骨一兩二分略○中

諸國進年料雜藥略○中

安房國略○中　龍骨卅斤有二龍骨調一○大宰府亦

〔東遊記後篇二〕龍鱗

越後糸魚川の近在、黑姬山の麓姬川の岸に、氷に臨みて大なる岩出たる所あり、先年姬川大洪水